

計量研究におけるクィア・フェミニスト方法論の可能性
「LGBT 職場環境アンケート 2015」の分析結果から
Possibilities of Queer and Feminist Methodologies in Quantitative Research
Findings from the “LGBT Workplace Environment Survey 2015”

平森大規 (ワシントン大学・院)
Daiki Hiramori (Graduate School, University of Washington)
hiramori@uw.edu

1 目的と背景

本報告では、日本において充分知られていない計量研究におけるクィア・フェミニスト方法論¹の研究動向について紹介しつつ、「LGBTに関する職場環境アンケート 2015²」を題材に、計量研究においてどうクィア・フェミニスト方法論が利用可能であるか検討する。

従来、クィア・フェミニスト調査法は計量研究者から「バイアスがかかっている」「主流な調査法にはなりえない」と指摘されてきた一方で、クィア・フェミニズム研究者は計量調査法がいかにクィア・フェミニズム研究と相性の悪い調査法であるか論じてきた。しかしながら、フェミニズム研究の立場から計量研究の利用可能性について論じる研究は数少ないものの蓄積されている。また、クィア理論についての議論が盛んになる中で、クィア方法論と計量調査法の接続可能性に言及する考察も少しずつではあるが増えてきている。

近年、日本では性的マイノリティに関する意識調査、疫学調査や当事者団体によるアンケート、マーケティング調査などが行われるようになってきた。しかし、これらの調査研究でクィア・フェミニスト方法論が明示的に取り入れられていることは極めて少ない。

したがって、本研究ではこれらの研究動向を紹介し、日本における性的マイノリティの研究においてクィア・フェミニスト方法論がいかに必要不可欠であるかを示す。

2 方法

本発表では、まずフェミニスト方法論とは何か、計量研究においてフェミニスト方法論をどのように活かすことができるのかを概説する。ここでは、フェミニスト経験主義、フェミニスト客観性、フェミニスト・スタンドポイント理論、「被抑圧者の方法論」(Sandoval 2000)などがキーワードとなる。次に、クィア方法論とは何か、計量研究においてクィア方法論をどのように活かすことができるのかを概説する。ここでは、クィア理論とは(1)同性愛を、支配的・安定的な形態であるセクシュアリティ(異性愛)に対する周縁、逸脱として捉えない、(2)「ゲイ・アンド・レズビアン・スタディーズ」という分野におけるレズビアン³の不可視化を問題化する、(3)ジェンダー、人種や階級などとの関連での同性愛に関する言及、実践に関する問題を考察する理論であるという de Lauretis (1991)の指摘を踏まえた上で、クィア方法論について検討する。続いて、「LGBT 職場環境アンケート 2015」の分析結果を利用しながら、これらの方法論が実際どのように使用されるか可能性を探る。

3 結果

性的指向およびトランスジェンダーであることと収入の関連を分析した結果、性的マイノリティであることは収入に対して負の影響をもたらしていることが明らかとなった。欧米の研究で示されている、レズビアンの高収入は確認されなかった。また、性的指向におけるマイノリティと性同一性におけるマイノリティの違いやジェンダーによる不平等など性的マイノリティ内の階層構造の存在が示唆された。当日は詳しい分析結果にも言及する。

文献

de Lauretis, Teresa. 1991. “Queer Theory: Lesbian and Gay Sexualities: An Introduction.” *differences: A Journal of Feminist Cultural Studies* 3(2):iii-xviii.
Sandoval, Chela. 2000. *Methodology of the Oppressed*. Minneapolis: University of Minnesota Press.

¹ 本稿では、ジェンダー・セクシュアリティを取り扱う研究のうち、特に明示的に女性・性的マイノリティの政治的立場から考察を行う研究をフェミニズム・クィア研究と呼ぶ。

² 「LGBTに関する職場環境アンケート」は、NPO法人虹色ダイバーシティが、国際基督教大学ジェンダー研究センターとの共同研究(2014年以降)で実施している調査プロジェクトである。